



講演 4

新しい人間と社会の創出：ピナトゥボ火山大噴火の被災民に学ぶ社会のレジリエンシー

京都大学東南アジア研究所教授 清水 展



皆さん、こんにちは。東南アジア研究所の清水です。きょうは、特に2階の高校生がたくさん来てくれてうれしいです、ありがとう。

パンフレットの「京都からの提言」の副題に、「活力ある未来の`想像、と新たな展開を求めて」とありますね。もちろん、この副題が意図するところは、京都大学の附置研究所・センターの研究の最前線、フロンティアが、こんなに広がっていて面白いよ、すごいよという紹介です。同時に私自身は、この「新たな展開を求めて」というキーワードには、展開をどこに求めるのか、誰に求めるのかという問いかけが含まれている点がとても大事だと思います。求める先は、もちろん、次の研究展開を推進する若い人たちです。そういう意味で、皆さんが、京都大学はエッジの効いた研究がいろいろあって面白いな、ぜひ受験したいな、と思ってくれることを願っています。

— 氏か育ちか —

今までのお三方のご報告は、午前中の第1第2報告が、DNAや遺伝子について、今終えられた第3報告は教育についてでした。午前と午後の報告は、ある意味で人間に関する両極端のアプローチ、すなわち人間とは何か、人間個々人の存在と行動を決定するのは何かに関して、異なる対照的なアプローチを代表しています。

二つのうちの一つは、人間の存在様式は生得的に、生まれながらに決まっている、今風に言えば、遺伝子とDNAによって決まっている（少なくとも割合が大きい）とする立場です。僕たちが生まれてから死ぬまでの生涯というのは、遺伝子のセットに組み込まれたプログラムが自動発現して発達成長してゆき、たとえば40歳とか50歳くらいになったらこんな病気になるだろうとか、ある程度は決まっている。両親から受け継いだ先天的な要因が主たる影響を及ぼして、生老病死の過程がおおよそ決まっているという考え方です。

この考え方は、哲学的にいうと、私とは何か、個人の主体性とは何かという問いに対して、それは私の身体や自意識ではなくて親からもらった遺伝子のセットなんだ、それが主役なんだという答えを導きます。暑さ寒さ、空腹、渇き、欲望を切実に感じる私の身体は、オギャーと生まれてから死ぬまでの70か80、せいぜい90年のあいだ、遺伝子のセットが仮住いする宿で、その遺伝子のセットは、次は私の子どもに受け継がれていく。要

するに、遺伝子が時空間を旅していく一時的な乗り物が私なんだという考え方を導きます。

こういう考え方を知ったときに私は愕然としました。自意識が強過ぎて自分の心と体を持て余していたころの私には、実は私なんてどこにもいない、自意識の幻想に振り回されているだけなんだということが、そら恐ろしいと思えました。と同時に、逆に身も心も軽くなったような気持ちになりました。人類誕生からの700万年か600万年の歴史がずっと続いているのは、この遺伝子が脈々と受け継がれてきたということでしょう。

でも、人間を考える上で、その遺伝子決定論ではなくて、後天的な、学習による影響と、それによる自己形成が決定的に重要なんだということが、同時に、確かにいえると思います。そこに関与するのが教育なんですね。ただ、その教育というのは、学校という制度によるものだけではなくて、私がずっと調査してきた、フィリピン北部ルソンの山奥の人たちの場合には、昔は学校がなくて、生きるために必要な知識や技術を親から直接に教わってきました。教育というものを、置かれた環境に適応し、よりよく生きてゆくための知と術を修得することと広く考えれば、教育こそが個人の考え方や生き方を決定するということもできますよね。

この生得的か後天的かということに関して、日本で普通にいえば、氏か育ちか、まあ、氏より育ちということになるんでしょうけれども、私自身は、氏も大事、育ちも大事、その両方が大事だというふうに思っています。ただ、一人で全部はできないので、文化人類学の専門家として、後天的な学習、育ちの面に着目して研究をしてきました。生まれ育つ環境によって、世界各地の人間はどこまで柔軟に多様な生き方をしているのだろう、できるのだろうという関心です。

どうして、そんな風に考えるのかというのは、多分、私自身の成育環境と関係があると思います。私は1950年代の初めの頃に神奈川県横須賀の引揚者寮で生まれ育ちました。幼稚園や小学校のときから、クラスメートに混血の子どもがいました。当時はあいの子と呼ばれていて、その後70年代に入ってからハーフと呼ばれるようになりましたが、すごく差別されていました。今思うと、そうした差別や偏見は、身近に見聞きする豊かで威張っているアメリカ兵の生活や振る舞いに対する親たちの羨望と反感が入り混じった複雑な感情が引き起こしたもの、あるいは反映したものだったと思います。

混血児のなかには孤児もいて、そういう孤児を引き取る施設にエリザベス・サンダース・ホームというところがありました。そこに引き取られた混血の孤児は、多くは養子になってアメリカに行きました。そうしますと、アメリカに行くまでは日本語をしゃべっていたんですけども、アメリカへ行ったら当然ですが英語でしゃべるようになりますよね。でも、引き取り先が白人の家庭なのか黒人やアジア系の家庭なのか、金持ちなのか貧乏なのか、あるいは住むのが東海岸なのか西海岸なのか中西部なのかによって、同じ混血の孤児でもまったく違ったように育っていくだろうなと思いました。ちょっと難しく言えば、人種や階級や言語・文化が存在を規定するということです。そう考えると、それはその混血

の子だけじゃなくて、もし私自身も何らかの理由で、生みの親が育てられなくて孤児院に入れられて、アメリカにもらわれていたら、英語しかしゃべれないアメリカ人になっていくのかな、そんなふうに思いました。

そうした経験が、きっと後天的な学習環境が決定的に重要なんだという思い込みと結びついて、文化人類学をするという動機になったのだろうかと、後知恵ですけれども思っています。

— 災害があって良かった？ —

言語と文化が重要だ、だから文化人類学なんだという前置きはさておき、きょうお話しするのは、自然災害が新しい人間と新しい社会の創出を導くということです。東日本大震災が3年前に東北地方を襲いましたし（2011/3/11）、10年前には阪神・淡路大震災もありました（1995/1/17）。私自身が一番長く深く調査してきたのは、1991年6月のフィリピン・ルソン島のピナトゥボ火山の大噴火と、それによって壊滅的な被害を受けた人たちの被災からの生活再建と創造的復興のプロセスです。今年で噴火から25年になりますけれども、復興のプロセスをずうっと長く研究してきて今確かに言えるのは、自然災害というのは破壊と喪失、個々の被災者に耐え難い苦痛と苦難をもたらすけれども、同時に新しい人間、新しい社会・コミュニティをつくっていく契機になる、そういうことを可能にするスペースを開くんだということです。いわば生みの苦しみとして災害を見ることです。



当たり前ですけど、災害はできれば避けたいし、逃げられるならば逃げたいですね。けれども災害が、ある日突然に襲ってくるのを防げないならば、災害が起こった後にどうするか、どう立ち直るか、どのように生活再建のための復旧・復興を進めるかが大事になってきます。そのための参考というか、ヒントやアイデアを得る手がかりのひとつになるよう、きょうのお話をしようと思います。

まず最初にビデオを見ていただきましょう。

(ビデオ放映)

ビデオのなかで語られた「ある意味では、噴火が起こって良かった」という言葉に、びっくりされたかもしれません。でも、すぐ後でそう言う理由は「噴火のおかげで、アエタは世界じゅうの人々の前に大きな集団として立ち現われたからです。だから、もう二度とふたたび、無視されたまま捨て置かれるなどということはないでしょう」と説明しています。そして実際に被災したアエタは、故郷を離れ、政府が用意した9ヶ所の再定住地と

それ以外の新しい土地での生活再建の苦闘をとおして、先住民としての自覚を強め、発言し、要求する集団となってゆきました。

アエタとは、ピナトゥボ山の一带に暮らしていたアジア系ネグリートです。アフリカのクン、サン、あるいはブッシュマンやピグミーと呼ばれるような人々と外見がとても良く似ています。男性で 150 センチくらい、女性で 140 センチほどの低身長とチリチリの縮毛の髪、暗褐色の肌などを身体的な特徴としています。



ビデオのなかで、アエタ自身の言葉を紹介して「噴火が起こって良かった」と断言した人は、ピナトゥボ山の南西麓にカキリガン村を新しく建設し、山中で移動焼畑による伝統的な暮らしをしていたアエタのために、開発プロジェクトを実施した NGO のディレクター、ルフィーノ・ティマ氏です。彼はカキリガンと呼ばれていた地に 1976 年に新しい村を作り、3 人の子どもとともに家族で移り住み、山を下りてきたアエタに、ブルドーザーで開いた畑を提供し、カラバオ（水牛）を与えて犁耕畑作を教えました。子どもたちのためには校舎を建てて、ティマ夫人が教師となり小学校教育の機会を提供しました。ティマ氏は 1991 年の大噴火の後には、被災からの復興を陣頭指揮しました。だから、彼も自身の経験から噴火があって良かったと心底思っていますし、断言できるのです。

二人目に話してくれた男は、アエタのリーダーのヴィクター・ヴィリヤ氏です。氏は、先住民であるアエタとしてピナトゥボ山麓の一带の土地に対する権利とともに、フィリピンの国民あるいは市民としての権利、そして学校教育を受ける権利を主張し、その一方で、アエタの文化を大事にすることを説いています。

このお二人とも、1977 年に私が初めてカキリガン村を訪れ、そこに 20 ヶ月暮らしてアエタの生活と文化、宗教についてフィールドワークをした際に、とても親切にしてくれました。集落には、電気もガスも水道ありませんから、お二人をはじめ、集落の人々の親切と手助けがなければ、調査はおろか生活をする事さえできませんでした。それ以来ずっと、40 年近いおつき合いを続けています。今年の正月休みにも、彼らを訪ねてきました。

— 東南アジア = ASEAN の可能性 —

ところで申し遅れましたが、私の専門は文化人類学と、東南アジア研究（主にフィリピン）です。東南アジアは今、政治・経済的に脚光を浴びています。かつてベトナム戦争と冷戦の時代には、アメリカとソ連・中国が覇権を争う代理戦争の戦場でした。冷戦の後に、いっとき欧米の関心が薄れましたが、近年、再び関心を集めるようになっています。台頭

する中国との関係で政治的に重要であるとともに、順調な経済成長を続ける東南アジアがそれ自体として重要性を増してきているのです。

東南アジアというよりも今ではアセアン（A S E A N）と呼ばれることが多いですが、10 か国を合わせた人口は6 億人を超え、欧州連合（E U）よりも多く、今も増え続けています。E Uには28 カ国が加盟していますが、ごく大雑把に言えば、E Uはキリスト教をベースにしたゆるやかな共通性が基盤となっているのに対して、東南アジアは宗教的な多様性が特徴です。世界最大のイスラム人口を有するインドネシア（総人口2 億5 千万、内イスラムは88%）があり、しかも穏健な市民社会をつくり政治的な安定と経済発展をしています。フィリピンは1 億の人口の90%がキリスト教徒です。大陸部のタイやカンボジア、ベトナム、ミャンマーなどは仏教徒が多く、アセアンでは世界の三大宗教が平和裏に共存しています。宗教以外にも、民族、言語、文化の多様性に富み、自然環境も多様です。そうした多様性の諸々が集約してあり、その共存共生を発展のダイナミズムとしているのが東南アジアの今の特徴です。

対象とする地域がまさに多様性に富むダイナミックな社会であるために、私が所属する東南アジア研究所の常勤教員22名の専門は文理に広くまたがっています。それが特徴であり、学際研究を推進するための強みとなっています。Ph.Dを見ると、法学部政治学、経済学、文学、工学、理学、農学、医学のそれぞれ博士号を持った人がいます。

そうした多様な研究者、専門家を擁するというのは、学際共同研究をするためです。なぜそれが必要かということ、東南アジア自体が多様性に富む地域であり国々の集合体だからです。ある意味で世界の問題の縮図であり、同時に人類の可能性の縮図を集約して体現しているところでもあります。だから東南アジア研究は、とてもチャレンジングだし、重要なのです。

— 文化人類学という学問 —

私自身の専門ディシプリンは文化人類学です。文化人類学というのは、異なる言語、文化を生きる人たちと私たちの違いと同じを研究する学問であると言えます。異文化理解とか他者理解とか言われるものを目的としています。日本人の研究者ならば日本ではない、アメリカ人ならばアメリカではない違う国に行って、しかも多くの場合、その国の首都ではない遠い地方の田舎や山の中に行って、何ヶ月、1年2年と暮らし（フィールドワークと言います）、そこの言葉を習得して研究をします。その理由は、いわゆる近代化に染まっていない、西洋文明の洗礼だか洗脳だかを受けていない、我々の社会や常識とは違う、もう一つ別の人間や社会のあり方というものを知りたいからです。それを知ることによって、というか言葉を修得して内側から理解することによって、人間の可能性、失われてしまったけれどもあり得る可能性を考える、そんな変わった研究が文化人類学です。

言いかえれば、他者や異文化を迂回した自己理解の試みということができます。そうし

た他者の理解を迂回して、自分の国に戻り、自分たちの社会や文化を相対化し、新しい目で捉え直し考えなおすことによって、より良い明日のために新しい社会と文化を作ってゆくことに役だとうとするものです。個人的には、自分自身を解放して自由になる、自分自身が豊かな人生を送るために、他者と異文化に学ぶということが一番の魅力で文化人類学を勉強し始めました。学校教育の優等生として、日本の常識とシステムを受け入れ過剰に適応してしまった自分を、あらためて作りなおすための手がかり探しと言えるかもしれません。初めに自己紹介しましたように、横須賀に生まれてアメリカに養子にだされたら、日本で育ち日本語で考えるのとはまったく違う人間になってしまうだろうという、子どもの頃の素朴な感覚と深く結びついていると思います。

— 生みの痛みとしての災害 —

ピナトゥボ火山の噴火の話をする前に、東日本大震災(2011/3/11)の衝撃を受けて、ある意味では皆さんも考え方が少し変わったのではないのでしょうか？私も、いろいろ思うところがありました。実際、犠牲者の数が2万人というのは、ほんとに大きな惨事でした。でも、死者だけの数からいえば、関東大震災(1923)の10万5千人、東京大空襲(1945)の8万4千人、沖縄戦(1945)の18万8千人(うち半数は民間人)、あるいは広島と長崎への原爆攻撃(1945)の計21万4千人に比べればむしろ少ないです。でも、それが私たちにすごく大きな衝撃をもたらしたのは、テレビや雑誌の映像がもたらしたリアリティーの禍々しい迫力と、もう一つは自然災害の猛威の前に人間存在の卑小さ、社会インフラのもろさというものを明らかにしたからです。

それともう一つ大事なことは、繰り返されてきた災害の歴史の想起、右肩上がりの直線的な進歩ではない歴史と循環する時間、そうした意識を私たちは強く持つようになりました。それと関連して、たとえば、今年は神戸大震災から10年とか、東日本大震災から4年とか、普通は過去の災害を起点として今現在を意識していますけれども、大震災を契機として、繰り返される歴史の中で今現在を、近未来に必ず起きる次の災害を起点として、そこから逆算して意識するようになったことです。次に襲ってくる災害まで残りあと何年あるだろうかという自覚を持つことは、災害への対策や準備を進めるために不可欠の心構えです。次には、関東から東海、四国沖にかけての沖合で巨大地震と津波が発生するでしょう、近い将来には、必ず東京直下型地震が来るし、富士山が爆発するかもしれません。

つい5日前まで、私は国際シンポジウムで報告するために、インドネシア・スマトラ島のアチェに行っていました。そこは、10年ほど前にスマトラ大地震(2004/12/26)が大津波を起こして、アチェで15万人、インド洋全体のタイやスリランカも含めると25万人ほどの死者を出しました。その激甚災害の一番の被災地のアチェは、津波に襲われる前には、独立を求めて内戦が20年ほど続いてました。しかし災害を契機として、マスコミをはじめ国際援助機関、国際NGOなどが救援と復旧・復興支援のために続々と現地

入りして活動しました。それによって、それまでアチェ独立運動を武力によって抑えこみ、時に過剰な弾圧をして過激な反発と独立運動の激化を招くという悪循環に陥っていた地域を、一気に外部世界へと開放することになりました。

軍による封じ込め作戦の対象となっていたアチェは、津波による壊滅をとおして、軍の封鎖と囲い込みが取り除かれ、秘密裏の軍事作戦や人権侵害の弾圧ができなくなりました。災害の緊急救援のために外国の政府や国際援助機関・NGOが入ってきて、その地域がオープンになり、世界が関心を持ったことによって、アチェに平和が訪れ、新しい社会の復興建設が可能になったのです。津波がなければアチェの内戦は今でも続いていたでしょう、と現地の皆が言ってます。言い換えれば、辛く悲しい被災の体験は、新しいアチェを作るための生みの苦しみであったわけです。

ピナトゥボの噴火やアチェの津波の被災からの復興過程を学びながら、私は今、日本の次の災害の際に、それを新しい人間と新しい社会を作り出すためのチャンス、新たな可能性としていくためにはどうしたらいいかということを、考えています。

ー ピナトゥボ火山の大噴火 ー

ピナトゥボ山というのは、ルソン島の西部に位置し、首都マニラから北西に120キロほど離れたところにあります。地図で見ますと、日本の九州から、奄美、沖縄、台湾へと南に下ってゆきますと、その先にフィリピンのルソン島があります。

1991年6月15日に、ピナトゥボ火山が20世紀最大級の規模で爆発しました。ピナトゥボ山の東麓のアンヘレス市には、4000メートル滑走路を2本持つアメリカのクラーク空軍基地がありました。ありましたというのは、クラーク空軍基地は、30～40センチほどに降り積もった火山灰のために、その復旧・改修工事の費用が莫大となり、結局、噴火から1年後の1992年に米軍が完全撤退したからです。



1980年代末には冷戦がほぼ終わったことも深く関係しているのですが、フィリピンから、クラーク空軍基地だけではなくオロンガポ市のスービック海軍基地も含めてすべての米軍基地が撤退してゆきました。ピナトゥボ噴火が新しい人間と社会を作ったという私の報告のポイントのひとつは、アエタだけではなくてフィリピン人とフィリピン社会についても言えます。米軍基地の全面撤退によって、フィリピンでは新しいフィリピンの自画像を描き直す必要性と必然性が生じたのです。

フィリピンは、20世紀初頭にアメリカに植民地化され、1946年に独立した後も、米軍基地の存在は引き続くアメリカの圧倒的な影響力と隠然たる支配の継続の象徴でした。

左派にとっては反米であれば愛国者になれば、右派にとっては冷戦下の避けがたい現実のなかで頼りがいある存在として、アメリカの存在はあまりに大き過ぎました。反発し抵抗するにしろ、恭順して利得するにしろ、アメリカを抜きにしては自己を定位することも正当化することも困難でした。しかしピナトゥボ山の大噴火が決定的な転機となり、1986年のピープル・パワー革命がもたらした新生フィリピンが真の自立への途を模索し、自立した国民・国家としての新たな自画像を構想することを余儀なくさせることになったのです。実際面でも、米軍基地の跡地が経済特区に指定されて基地に頼らない経済が発展してゆきました。

さて、アエタの話に戻しましょう。私は、このピナトゥボ山の南西の麓の村に、1977年から79年まで20か月住みました。電気もガスも水道もないようなところでした。そのころの子どもたちが、今では子や孫のいるお爺さんお婆さんになっていますが、そのあいだの変化をずっと見てきています。この左側は、1977年に撮った記念写真の母子なんですけども、それが2013年には、これだけ家族が増えています。こうした変化を示す写真がたくさんあります。



1991年6月にピナトゥボ山が噴火したとき私は、たまたま4月から研究休暇でフィリピンに1年の予定で来ていて、翌年の3月末まで滞在しました。その間、日本のNGOのボランティアとして現地で被災したアエタらの支援活動に参加するとともに、アエタの友人知人たちから被災の体験談、被災前の生活や思い出などの聞き書きをして本にまとめ、マニラで出版しました。そして、話をしてくれた人たちはもちろん、友人知人たちや小学校などに配りました。体験あるいは記憶の貯金箱みたいなものとして次の世代に伝えていってもらいたいと願ったからでした。

噴火のために、アエタの全員、おそらく2万人以上が山を下り、避難センターやテント村などでの一時暮らしを余儀なくされました。その後、半年ほどが過ぎた頃から政府が建設した再定住地に移り住み、新しい土地で新しい生活を始めました。かつて山中で移動焼畑農耕をしていた人たちは、大半が定住地で平地民と同じような暮らしを始めたわけです。彼らは、再定住地の近くの町などの建設工事の現場や、平地民の農民の農作業や、さまざまな種類の雑業に就きながら、補助的に山で焼畑をして食料を確保して暮らすようになり

ました。

一部は、おそらく2割ほどは、ピナトゥボ山系に戻って焼畑農業を基盤とする生活を回復しました。ただし噴火前と異なり、主食のイモ類だけでなくバナナや豆類その他の商品作物なども栽培し、町のマーケットで売って現金を得ています。作物をマーケットまで運ぶトライスクル（サイドカー付きのオートバイ）は、裕福になったアエタが保有して、料金をとってサービス提供しています。昔は、町まで出てきてマーケットで売る、そこで得た金で必要なものを買うということはほとんどありませんでした。必要なものは山まで上がってくる商人と物々交換をして手に入れてました。必要なものというのは、料理用の鍋釜、塩とか、農作業で使うナタ（山刀）とか衣服とか、そうした品々でした。

— 被災アエタの生活再建 —

再定住地に居を定め、平地民と同じような暮らしをするアエタのなかには、平地民と結婚するような人も出てきました。普通、国際結婚というか、異なる民族間の通婚（インターマリッジ）は、だいたい金があって社会的地位の強い側の男性と、そうじゃない弱い側の女性という組み合わせが普通です。たとえば、日本とフィリピンの国際結婚は、日本人の男性とフィリピン人の女性の組み合わせが9割、日本人女性とフィリピン人男性が1割ぐらいの比率です。日本人とアメリカ人の結婚の場合は、フィリピン人ほどには多くはありませんけど、その男女の割合が逆になり、アメリカ人の男性と日本人の女性の組み合わせが多くなります。アエタと平地民との結婚の場合は、ほぼ半々の比率、あるいは男のアエタと平地民の女性のほうが多いぐらいになっています。アエタの社会的地位の向上を示すものといえます。

この写真の彼は平地民女性と結婚した一人です。40年近い友達です。彼の息子は噴火のときは4,5歳でしたけどオロンガポ市近くのイーラム再定住地で学校教育を受け、高校を出て職業訓練学校に1年行ってから溶接工になりました（フィリピンの教育制度は、小学校6年、高校4年、大学4年です。2015年にアセアン共同体が発足するのに合わせ、高校を6年、新学期の開始を6月から8月に制度改革しました）。彼は、初めは、アメリカ軍が撤退したスービック海軍基地の跡地に進出してきた韓国の韓進グループのスービック造船所に雇われて溶接工として5,6年の経験を積み、その後は海外出稼ぎに出て、今は中東のドバイで働いています。噴火の被災が、子どもたちに教育をとおした新しい可能性を開いたのです。

彼の最初の奥さんはアエタ女性で、噴火の翌年にイーラム再定住地で犬に噛まれて狂犬



病で亡くなりました。その後に再婚した相手が平地民の女性となった次第です。彼のようなインター・マリッジの男女のあり方が、ある意味、アエタの人たちの社会的な地位の上昇というものを物語っています。

アエタ被災者が再定住地での新しい生活のなかで経済的に力をつけると同時に、特に韓国のプロテスタントの牧師が積極的に宣教活動をしたことにより、各再定住地にたくさんの教会ができ、洗礼を受けてキリスト教徒になっていく者が多くでできました。アエタの若者のなかにも、学資と生活費の支援を受けて神学校に通い、牧師になる者も出てきました。右上はカキリガン村で生まれ育って牧師になった友人です。

右下は、今年の1月に訪れたクラーク空軍基地があった近くのサパン・バト村に韓国人の牧師が建てた教会と、牧師になったアエタの家族のための家です。家と教会のなかは、この写真で分かるように、なかなか立派です。教会の中では、若者のバンドがギターとドラムとベースの伴奏をして賛美歌を歌うという、マジョリティのフィリピン人とたいして変わらないようになってきています。噴火から25年を経て、ものすごく大きな変化が生じました。



— 新しい人間の創出 —

噴火の後に生じたアエタの生活スタイル、自己意識と自画像、世界観等の急速な変容について、結論として、以下のようにまとめることができます。結果からみれば、多くのアエタは、ピナトゥボ山麓一帯の限られた／閉ざされた生活世界で自給自足の暮らしをする移動焼畑民から賃金労働者（あるいは兼業焼畑民）へと変化しました。世界史的に見て、18世紀後半にイギリスで始まった産業革命が引き起こした「近代化」の衝撃を受け、地球上のほとんどの社会が200年から100年の歳月のなかで経験してきた変化を、アエタは数年から10年足らずで経験したのです。

そこで特筆すべきことは、アエタ被災者たちが、その変化の奔流に巻き込まれ押し流されて固有の文化と自己の尊厳を失い、社会の周辺や底辺へと追いやられ押し込められるのではなく、生活世界の劇的な変化に巧みに適応し、新しい人間となり、新しい社会を創っていったことです。フィリピンでもっとも遅れ、未開であるとされてきたアエタの柔軟性

と潜在力、われわれと変わらぬ学習能力と適応力の高さは驚嘆に値します。

新しい人間とは、具体的には、個々人の時間（歴史）と空間（地理）の認識において、何よりもそのスケールが格段に広がったことです。時間的に言えば、過去と未来の双方へと時間感覚・歴史意識が引き伸ばされました。親たちは、子どもたちの将来のために積極的に学校教育を、できれば高校や専門学校（理想的には大学）までゆかせようとし、子供たち自身も親たち以上にそう望むようになりました。噴火前までは、生業である焼畑農耕に合わせて1年を単位とする循環する時間のなかで暮らしていたのが、子どもの教育や将来、より良い生活を考えることで、1年後、2年後、さらに遠い将来のために今すべきことを考えるようになりました。

また、NGOのエンパワーメント・セミナーなどを通じて、自分たちがフィリピン諸島に最初に渡来した先住民であるとの意識を強めました。急進的なグループのなかには、先祖伝来の土地の権利を主張する者たちも出てきました。そして、普通のアエタたちも、平地民社会に隣接する再定住地で、公務員や商人、教師、その他さまざまなフィリピン人（平地キリスト教民）との日常的な接触、交渉、交流が格段に広がる生活をするなかで、彼らとは違うアエタであるとの自意識を強めました。そのことが、先住民であることと同義になり、自分たちの祖先が「記憶にない遠い昔」にフィリピンにやってきたことを自覚し、遠い過去へと遡る歴史意識を持つようになりました。

また、アエタに対しては、格別の支援が2年3年と長期に与えられたことをとおして、彼らは、生死に関わる危機的な状況を支えてくれたのは、フィリピンの地方政府や中央政府・赤十字などとともに国内外のNGOであり、とりわけ海外のNGOや国際機関であったことを強く実感しました。噴火の前まではピナトゥボ山麓の一帯に限られて完結した生活から、今では海外の善意の人々にも支えられた生活へと大きく変わり、そのことを実感し、国を超えた支援の広がりやネットワークを理解し、それに応じて地理的、空間的な認識地図も拡大していきました。先に述べた時間感覚や歴史意識とともに地理感覚や空間（世界）認識も一気に拡大したわけです。新しい自己意識と、新しい時空間の認識をもつ、新しい人間が生まれたと言えます。

— ピナトゥボの経験から学んだこと —

残り時間が少ないので、最後に簡単なまとめをしたいと思います。ピナトゥボ山の大噴火から25年ほど、被災したアエタの友人知人たちの生活再建の歩みを身近で見てきた者として私が痛感したことは、先ほども言いましたように、自然災害は旧来の生活インフラ、社会インフラを根こそぎ破壊してしまうということです。東日本大震災の東北地方の沿岸部がそうでしたし、スマトラ島のアチェもそうですし、ピナトゥボがそうでした。津波の後には瓦礫の山だけが積み上がり、噴火の後には火山灰がすべてを覆いつくしてしまい、すぐには暮らせない、食べてゆけない、何もない真っさらな土地が出現しました。でも逆に、

だからこそ、そこに新しい可能性が生まれてきました。アチェでは、20 年も続く内戦に終止符が打たれ、平和が回復され、そのなかで個々人の生活再建と社会経済の復旧・復興が進められました。

ピナトゥボの場合には、産業革命以来の 200 年の人類史の経験をアエタは 10 年あまりで追体験し、新しい人間として生まれ変わってゆきました。その際、フィリピンは、日本と比べて中央政府の力が弱い、財政的な余裕がないために、外国政府の援助や国際 NGO など、海外からの支援が大きな役割を果たしました。アエタは、一目してわかるように、背が低く、肌が浅黒く、髪がチリチリで普通のフィリピン人とは違いますし、被災当初には無力あるいは非力で、見るからにかわいそうなイメージとともにメディアの前に登場しました。ですから、その映像や写真を見た人たちが、だから助けてあげなければという気持ちをかき立てられました。彼らの弱さが、逆に海外の善意の人たちの関心と憂慮を強く引きつけ、大きな支援を継続的に受けることが可能となりました。アエタ自身の生活再建に向けた自助努力、地域社会からの支援という共助、そして地方政府や中央政府の公助とともに、とりわけ海外からの支援という外助が重要な働きをしました。日本で強調されている自助共助公助が 3 つ合わせて内助と呼べるものならば、外国政府や国際 NGO の支援は外助ということができるでしょう。その外助が大切なのです。

このことは、日本で近い将来に必ず起こるであろう東海沖や中南海沖の地震、そのほかの大きな地震や他の災害のときにも、海外からの支援を頼るという選択肢があることを示唆しています。これから日本は急速に少子高齢化が進み、経済的に力を減じて衰微していくでしょう。そのため、日本国内だけで対応できる可能性は小さくなっていくだろうと思います。内助だけで乗り越えられないならば、外からの支援を積極的に受けること、それが可能となるような仕組みを今から作っておくことが大事です。仕組みとともに、あまり肩肘はらず突っ張らず、弱い自分を受け入れて、困ったときには海外からもどんどん助けてもらおうという低姿勢、弱さを隠さない開かれた構えというのも案外と大切です。このことが、アチェとピナトゥボから私が学んだことです。

以上です。どうもありがとうございました。